

学校現場から悲鳴が聞こえる

第15回「部活指導は仕事じゃない」って知ってますか？

中学校や高校の教職員には校務分掌で部活動の顧問配置があります。この紙面でもかつて高校の部活指導について多忙な実態をとりあげましたが、今回は中学校の先生です。毎日、凄まじい仕事量を当たり前のようにこなしていた先生が、結婚し子どもが出来てから勤務の「異常」さに気付かされます。

フロローグ

・・・・・・・・6時間目終了のチャイムが鳴り、清掃と帰りの学活を済ませると、急いで着替えて部活動へ。顧問が早く行かないと、生徒たちはなかなか練習を始めない。それはそうだが、体は大きくてもまだ子どもだ。飽きないようにメニューの組立にも工夫が必要だ。集中しないで長々と練習しても意味がない。もちろん活動中も叱咤激励しなければ良い練習はできないし、しっかり見ていないとケンカやいじめの心配もある。練習が終わると下校指導。家に帰すまでが顧問の責任だ。夏場は6時半まで練習して、生徒を帰してから職員室に戻ると7時。さあそろそろ仕事を始めよう。まずは提出物のチェックから。そういえば管理職に提出しなきゃならない書類があった。なんだか年々書類が増えているような気がする。この書類を書くことで生徒に何のプラスがあるのだろう…。仕事の区切りが付いたら、不登校の生徒の家に家庭訪問してから帰ろう。授業の準備は家でやればいい。土日は練習試合だから天気が心配だな。6時には天候判断して、相手チームの先生に連絡しないと。もうすぐ大会だし。次の練習試合の相手を探さなければ・・・・・・・・。

家庭を蝕む教師の“仕事”

Sさん 中学校の教員になってから、こんな生活を10年以上続けてきました。自分が経験したことのない種目でも、手を抜くことなくやってきました。時間とお金

をかけて審判資格をとったり、指導法を学んだり。肉体的には大変でしたが、生徒のためと思い、辛くても頑張ってきました。

記者 私の経験でも運動部の顧問になると、審判資格が必要になることが多く、ライセンス取得のために講習会に参加し、ライセンス料も自費で支払うなど確かに時間とお金がかかりましたね。

Sさん そんな私も結婚し、子どもが生まれました。妻も中学校教員であり、当然保育園に預けることになりましたが、そこで初めて気付きます。朝7時に家を出て、夜10時に帰ってくる。さらに土日も部活で家にいない生活は普通ではなかったことに。平日、なるべく早く帰ろうと思っても生徒が部活をしているのに顧問が帰るわけにはいかないので、祖父母に迎えを頼みます。土日、保育園がやっていなくても、子どもを祖父母に預けて部活に行きます。「この国では、じいちゃんばあちゃんがない家庭は一体どうやって子育てをしているのだろう」という素朴な疑問が湧いてきます。

記者 妻から「我が家は母子家庭だ」と言われたことを思い出しますが、その時はどうにもならないジレンマがありました。

“自発的な” 脱法労働

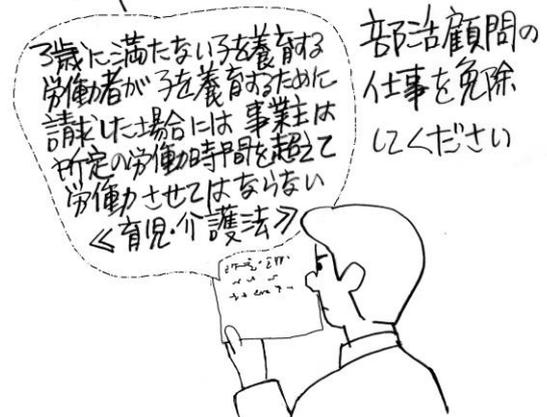
Sさん 《3歳に満たない子を養育する労働者が子を養育するために請求した場合には、事業主は所定労働時間を超えて労働

させてはならない》この育児・介護休業法の趣旨に則って、部活動顧問の免除を申し出ました。市教委からの回答は「部活動は自発的勤務なので時間外労働には当たらない」つまりこの法律は適用されないということです。自分が仕事だと思って頑張ってきたことが、仕事ではなかったことを、この時初めて知りました。「仕事ではない」以上、勤務時間後の部活指導はやる必要がないし、土日もすべて休みにしても法的には何の問題もないでしょう。しかし、目の前の自分を必要としている生徒たちがいるのにそんなことはできません。こうした教員の良心によって成り立っている部活動なのに「自発的にやっているのだから後のことは知りません」という姿勢に大きな矛盾と憤りを感じます。

記者 教職員組合の調査でも先生と同じ悩みや矛盾を感じている人は沢山いますね。最近ではネット上でも話題になりました。

強者の論理・弱者の視点

Sさん ネット上には「部活が嫌なら中学校の教師など辞めればいい」「部活をしたくないなどという情熱のない人間は教師をやる資格がない」などの意見もあり、自発的部活指導は一定の支持を得ています。しかしそこには強者からの視点しかなく、弱者からの視点を全く欠いています。子どもがいない人や、育児を配偶者に任せきりの人には、何とか時間をやりくりしながら育児をしている人の生活が想像できません。祖父母が元気で、いつでも子どもを預かってもらえる人には、土日の子どもの預け場所を必死で探す人の気持ちは理解できません。バリバリに部活指導をして信頼を得ている人には、部活指導が苦手だったり、時間的にそれができない人の立場は考えられません。なぜ断言できるかという、私も強者の側にい



たからです。そして強者側ではこう思っています。「俺は自分を犠牲にしてこんなに頑張っているのだから、他の人ももっと頑張って欲しい。これじゃ不公平だ」と。

実は、強者の側も辛いのです。中には「部活が三度の飯より好き」な人もいるでしょうが、内心無理をしている人も沢山います。「自発的勤務」などという不誠実な言葉を知らないために、誠実な人ほど、情熱ある教師であろうとして部活の負担を「自発的」に増やします。本来やらなくていいはずの仕事を生み出し、その負担によってますます余裕がなくなります。余裕がないのでストレスが溜まり、部活を熱心にやらない教師に対して不満を感じるようになります。

一人の人間として

記者 結婚されて生活が一変したわけですが現状はどうしていますか。

Sさん 子どもが生まれ、私も弱者になりました。教育への情熱を失ったつもりはありませんが、時間を生み出すことが物理的に不可能になりました。工夫をして10分間の休み時間も有効に使い、コツコツ

仕事を片付けています。持ち帰れる仕事は家で深夜にやりますが、部活だけはそうはいきません。部活に時間が割けないのは情熱の多寡の問題ではなく、勤務時間外の奉仕活動で成り立っているという矛盾した仕組みの問題です。

話は変わりますが、北欧に行ってきました。とても不便なところですよ。夜間や休日、お店はやっていません。法によって企業の自由な競争が規制されています。こんな不便な国で人々はどうか過ごしているかということ、多くの人は夕方4時には仕事を終え、帰宅して家族と過ごします。そして土日はもちろん、夏休みには2ヶ月のバカンスを家族と過ごすのだそうです。企業には、労働者に連続した長期休暇をとらせる法的義務が存在します。一方、日本は便利な国ですね。いつでもどこでも何でも手に入ります。企業は自由に競争するので、際限なく便利な商品やサービスが登場してきます。自分の時間を犠牲にしているなどと考えずに自発的に企業のために働く労働者が評価されます。残業せずに家族と過ごしたいと思っても、口に出すのははばかりられる国です。労働者を守るための法律はありますが、権利を行使しにくい国です。

このことと同じことが部活指導にもいえます。部活も自由競争なので、練習時間や大会数は際限なく増え、保護者も顧問も過熱していきます。自分の時間を犠牲にしているなどと考えずに『自発的に』部活を行う教師が評価されます。世間は、教師も労働者であり、父親や母親であるということを忘れがちであり、また教師の側も人間としての権利を要求することに一抹の罪悪感にさいなまれています。それは教師が尊い職業だと分かっているからです。儲けを上げることが目的ではなく、これからの社会を作る人間を育てている特別な職業だと分かっており、

子どもたちのために、時には自分より仕事を優先させる必要があることも分かっているからです。

記者 そういった教師の思いを逆なでするかなのような市教委の回答は全く不当と思いますが、対市教委という問題だけではなく抜本的な解決が求められていますね。

価値観の多様化、今がチャンス

Sさん 「部活動は自発的勤務であり、正規の仕事ではありません」などということをおぼろげに教わったこともなければ、「校長は時間外勤務を命じることができない」などということも教わりませんでした。雇用者側は「部活動は職務命令ではなく、教員には義務がない」ということを教員や保護者に明確に示すべきです。そして教員側に部活をやるかやらないかの選択権を与え、部活をやるかやらないかを選択した教員には部活手当を支給すべきです。これをやらないのは矛盾に気がつきながらそれを解消しようとしないう雇用側の不作為です。教員の犠牲には目をつぶり、コストをかけずに現状を維持しようとする行政側の姿勢は問題です。私たちはこういったことを声に出し、行動していくことが大切だと思います。一所懸命にやっていることが仕事として位置づけられていないことにおかしいと気付くことが大切です。

近年、SNSの発達によって「部活はおかしい」という声が全国的に広がってきています。若い先生たちの価値観も多様化していて、自分の生活よりも部活が大事という人は減ってきています。今がチャンスだと思います。

記者 読者の多くがこの事実に関心すると思います。そして学校の内外からこの状況を変えていくことが、いま本当に求められているということをおぼろげに発信していく必要性を強調しておきたいと思います。